

中村元博士の生涯と思想

中村元記念館学芸員 笠原 愛 古

本稿は、附属図書館において2019（令和元）年6月に開催した企画展『中村元記念館コレクション 丸山勇写真展「中村元とブッダのことば」』の期間中に行われた記念講演、「山陰が生んだ知識人たち—中村元と増田渉—」（2019（令和元）年6月22日）のうち、笠原氏の講演内容をまとめたものである。

~~~~~

只今ご紹介にあずかりました、中村元記念館学芸員の笠原と申します。

この度、中村元博士のご紹介をさせていただく機会をいただきました。島根大学法文学部長の田中則雄先生をはじめ、島根大学法文学部山陰研究センターと島根大学附属図書館の皆様、ならびにこの講演に足をお運びいただきました皆様にも感謝申し上げます。

### 0. はじめに

それでは早速、中村博士の生涯と思想についてお話をさせていただきたいと思いますが、中村博士のご紹介のまえに、本日の主題が「山陰が生んだ知識人たち—中村元と増田渉—」となっておりますので、まずはじめに、この山陰にゆかりのある人物として知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と、中村博士とのつながりをお話したいと思います。

#### 0.1 小泉八雲と中村元

中村博士の著作の中に『比較思想の先駆者たち』<sup>1)</sup>というものがありまして、その中で中村博士はハーンについて書いておられますので見ていきましょう。引用します。



記念講演のポスター

「ラフカディオ・ハーンといえば、日本の人々は松江を連想し、また松江といえば今日ではハーンをぬきにしては考えられない。(略) わたくしはハーンにはもちろん会ったことはないが、こどものころから親しみをもっている。(略) わたくしの母(中村トモ)はハーンが人力車に乗って出かけているのをよくみかけたという。(略) またわたくしの伯父、高橋勝(母の実兄)は、ハーンに英語を習ったという。」<sup>2)</sup>

引用を終わります。ここに出てくる高橋勝氏と中村博士の母トモがハーンに会ったという時期は、今で言うところとそれぞれ中学生と小学生ぐらいだった頃の話だそうです。中村博士がハーンの仕事の次のように評されています。引用します。

「ハーンの『怪談』その他には、多くの伝説口碑が書き記されているが、この地の文献にも見当たらずなものが多い。ハーンが書いておいてくれなかったら、ついにすべて消え失せてしまったに違いない。(略) ハーンのように、日本人の心に、生活に、可能な限り接近して身を以て理解に努めた外国人は少いであろう。」<sup>3)</sup>

引用終わります。この「可能な限り接近して身を以て理解に努め」る研究態度は、中村博士が生涯を通じて、自ら実践されたことでもありました<sup>4)</sup>。

さて、前置きが長くなりましたが、中村博士の話に戻りましょう。ハーンが松江に滞在していたのが1890年から1891年ということですから、中村博士が松江でお生まれになるのはその20年後ということになります。

## 1. 中村元博士の略歴

中村元博士は、1912(大正元)年に島根県松江市殿町にお生まれになりました。中村家がかつてあった場所は松江市奥谷町ですが、母方の実家である殿町でお生まれになりました。元年に生まれたことで、元と名付けられたそうです。ただ翌年には、アクチュアリーをされていたお父上の仕事の都合で東京に移れることとなります。

中村博士は、簡単に申し上げるならばインド哲学や仏教学という分野を研

究された学者で、わが国では「比較思想」という新しい学問分野を開拓したことで知られています。また東京大学名誉教授という肩書が物語るように永く東京大学で教鞭を執られた方でもあります。そして退官後は、自由な学問のために私塾「東方学院」を設立され、自らは東方学院長の肩書を好んで使われていました。その後は、1989（平成元）年に、ご自身の研究の成果により、「東洋思想研究の世界的権威」として松江名誉市民を贈られました。そして、1999（平成11）年10月10日午前10時、86歳でその生涯を閉じられるまで、1500点を数える著作や論文を遺されました。

## 2. 中村博士の学問的位置付け

中村博士は、生涯に2度の著作集を出されるという膨大な業績を残されましたが、現在の学問上どのように位置づけられているのでしょうか。

その一部に焦点をあてて申し上げるならば、アショーカ王の即位年代と仏滅年代との通説化<sup>5)</sup>をはじめとして、膨大な資料から歴史的人物としてのブッダの生涯を探究した『ゴータマ・ブッダ』（春秋社）<sup>6)</sup>、完成まで30年近い歳月をかけた『佛教語大辞典』（東京書籍）<sup>7)</sup>など複数の著作がとりあげられ、仏教を思想としてとらえ教団から自由な研究を行ったことで、「戦後を代表する印度哲学＝仏教学者」<sup>8)</sup>と評価されています。

中村博士は思想研究の分野においても、『比較思想論』、『世界思想史』など独創的な研究が知られていますが、伝統的な日本思想史、とりわけ近世仏教思想についての研究も高く評価されています<sup>9)</sup>。

それぞれの専門的な議論には立ち入りませんが、これらはいずれも2010年代以降に出された評価であり、中村博士の業績が現在もなお大きな影響を与えているということがわかりいただけるでしょう。

## 3. 少年時代の中村元

さて、その中村博士がお生まれになったのは1912（大正元）年と先ほど申し上げましたが、2012（平成24）年に中村博士の生誕100年を記念して松江市八束町に中村元記念館が開館いたしました。博士の蔵書3万4千冊の管理と、誰でも自由に学べるという博士の理念を継承した東方学院松江校を併設運営しています。

記念館では、博士の蔵書のほかにも、子供の頃の日記や作文なども展示しており、在りし日の博士の姿を垣間見ることができます<sup>10)</sup>。では実際に博士はどのような少年時代を送られたのでしょうか。

小学生時代は関東大震災で大阪に転居された一時期を除いて、東京の西片にある誠之小学校に通われました。この頃の得意な科目は歴史で、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）で国史を教えられていた叔母の高橋壽恵子の影響が強かったのではないかと述懐しておられます。同じ町内に住まわれている中山久四郎（東洋史学者<sup>11)</sup>）からも「君はよく歴史を勉強しているね」と言われるほどでした。一方で、苦手な科目は音楽だったそうです。「歌舞音曲の類は聞いてはならぬ。見てもだめだ。」<sup>12)</sup>と教えられていたからかもしれません。中学生のころに中村少年が書いた作文には次のように書かれています。「私は小学校の時を考えて見ると、楽しく感じる事は一も二もなく好いていた。遊戯と娯楽は何よりも大好きであった。殊に教科書等の一ページよりも武勇談や小説の一行のほうがどんなに良かったかしれない。」と、当時の等身大の少年の姿が浮かんできます。

中学校への入学試験について書いた文章も残っています。「国語の試験二題の中一題は違へてしまった。始めからこうなのだから他はしれている。更に作文に至っては全く駄目である。平生は不勉強ばかり、(略)地理歴史は優しかったが、理科には全く途方に暮れた。数学も違へたところが相当あるらしい。」<sup>13)</sup>ある時、叔母の壽恵子から借りた本が難しいと嘆く中村少年に、「今、国語をよく勉強しておきなさい。試験だけではなく、将来のためにも必要なことなのだから……。」と諭されたといえます<sup>14)</sup>。

さて旧制中学の入学試験は無事合格したものの、その頃から体調を崩していた中村少年は病院で診察を受けます。結果は、腎臓の病気でした。当時の日記をみると、「手足を縛られ食物まで制限されてはただ悲嘆の一語のみ。」中学生にとっては過酷な療養生活であったことがみてとれます。医者からも運動を禁じられ、一度も登校しないまま結局一年間学校を休学することになりましたが、中村少年は「一年をくれたとて一生に関係はしない。今一年先に行ったとて後世に名を遺す人は何人あろう。伊能忠敬は、あの通り五十数歳からの晩学であったが、立派な業績を残した。過去は過去。観念すべきだ。」<sup>15)</sup>と気持ちを切り替えたのでした。

この時期から自然と読書をされるようになり、哲学書や宗教書を好んで読まれるようになったと後に述懐しておられます。中学一年の時に書かれた一文には、「宗教と云ふものは、或る偉大な一の物をおし立て、之を旨とし、以て世を精神的に治めるものである。」という中村少年の関心を象徴するような文章も見られます。

中学時代に中村少年の印象に残ったのは、木代修一という歴史の先生でした。「木代先生は当時の中学生には勿体ない程度の高い講義をされた。(略)学問に専念している人のすがたというものを身近に示されたような気がする。」この時に使われた教科書は「世界史」というもので、当時、国史、東洋史、西洋史と別々に教えられていた時代に、それらを総合した「世界史」として教えられたというのは「大きな卓見であった」そうです。

中村少年が中学四年生の時に書いた作文には「日本人の支那古典読解に対して採用した方法の歴史的過程」というものがあり、その最後には先生から「論理的な方面であるなら、どのような方面にも君の進む道が開け始めているということを確認する。幸に努力されよ」と、励ましの言葉が書かれています。

#### 4. 高校時代の中村元

この頃から中村少年は哲学に関心があり、当時の哲学を学ぶにはドイツ語を学ぶべきという風潮があったために、旧制第一高等学校に進学されると、フランス語、ドイツ語、英語の中から、ドイツ語を学ぶ文科乙クラスに進学されました。この頃教えられた先生には論理学者の須藤新吉先生<sup>16)</sup>、歴史学者の亀井高孝先生<sup>17)</sup>などがおられましたが、より決定的であったのがドイツ人のブルーノ・ペツォルド先生との出会いでした<sup>18)</sup>。ペツォルド先生は仏教の研究もされていたために、時折ドイツ語の授業のなかで仏教の話にも及んだそうです。後に天台宗の大僧都の位を贈られるこのペツォルド先生との対話のなかで、「仏教を思想的なものとして理解するためには、このドイツ人とのドイツ語による対話が多分にわたくしの理解を明確にし、確信を持たせるに至ったことは否定できないと思う」<sup>19)</sup>。と非常に強い影響を与えられたといえます。

## 5. 大学時代の中村元

仏教を思想として理解するという自らの関心に従って、東京大学のインド哲学科に進学します。中村博士はとりわけインド哲学と独創的な思想研究で評価されていますが、それはこの大学時代に出会った二人の恩師の影響が強かったからと言われています。一人目は倫理学・日本倫理思想史などを教えられていた和辻哲郎先生で資料の取り扱い方などを<sup>20)</sup>、今一人が仏教について卒業論文を書いた中村青年に「日本仏教の源流であるインドを研究せよ」とインド哲学の道を示された宇井伯寿先生でした。

## 6. 中村博士の主な業績

中村博士は、大学院に進学され7年かけて、弱冠30歳で博士論文『初期ヴェーダーンタ哲学史』を書きあげ、31歳には東京大学の助教授になられます。中村博士はこれ以降膨大な著作を遺されたことは冒頭に触れましたが、ここで中村博士の代表的といえる著作を紹介します。

### 6.1 『初期ヴェーダーンタ哲学史』（岩波書店）

これは先に挙げた博士論文ですが提出の際には手押し車一杯の原稿であったために、指導教官の宇井伯寿先生が「これは読むのが大変だ」と声を上げられたといえます。この博士論文は『初期のヴェーダーンタ哲学』、『ブラフマストラの哲学』、『ヴェーダーンタ哲学の発展』、『ことばの形而上学』の4巻本として出版され、日本最高の学術賞である日本学士院賞恩賜賞を受賞されます。後に『シャンカラの思想』が付け加えられ5巻で古代から中世までのインド哲学史を構成しています。

### 6.2 『佛教語大辞典』（東京書籍）

これは1975(昭和50)年に上下別巻の3巻本として出版されたものですが、1967(昭和42)年11月頃に20年かけた原稿を当時の出版社が紛失、さらに8年近い歳月をかけて完成させたものです。そのもとになったと言われているのが戦後まもなく1947(昭和22)年に出版された『佛教語邦訳辞典』で、その「はしがき」には博士の熱意を見て取ることができます。

「佛教の思想を理解し、それを平易な邦語で表現するということは、今後仏教徒にとっては最も必要なことである。たとひ佛教を信奉しない人でもその必要性を認めることに、やぶさかではないであろう。」

これは最初期の仏典には、漢訳仏典にみられる仏教独自の用語はなく平易な言葉で記されており、であるならば、わかりやすく「いまの日本人に共通のことば」、「日本の伝統に即した表現」にすることが必要ではないかと感じられたためでした。

### 6.3 『東洋人の思惟方法』(春秋社)

中村博士の独創的な思想研究として知られるもので、『インド人の思惟方法』、『シナ人の思惟方法』、『日本人の思惟方法』、『チベット人の思惟方法』からなっています。2500年前のブッダの思想がそれぞれの国に伝わり、どのように異なる形で宗教化されたかを論じられたものです。それによって「東洋」とひとくくりされる民族の多様性を明らかにされました。

これらは海外でも高く評価されロックフェラー財団の援助を得て英訳、第36代アメリカ大統領リンドン・ジョンソンに贈呈されました。のちに「韓国人の思惟方法」が追記され、『チベット・韓国人の思惟方法』として決定版中村元選集に収められています。

### 6.4 『ゴータマ・ブッダ』(春秋社)

これは「2. 中村博士の学問的位置付け」で触れたものです。中村博士のブッダに関する著作は多くありますが、それらに通底する中村博士の「ブッダ」に対する研究態度は次のようなものでした。

「釈尊の生涯を述べた書としては、古来「仏伝」なるものが多数伝えられているが、それらは釈尊を讀めるあまり、幾多の神話・伝説にまとわれているために、まるで妖怪談を読むような印象を与える。しかしかなる神話・伝説の奥にも、そのもとづく歴史的事実があったに違いない。(略) かれは突然天から降ってこの世に現れてきた存在ではなくて、南アジアの風土のうちに歴史的社会的な幾多の諸条件・制約のもとに、生まれ、育ち、活動し、

死んでいったのである。その事情を吟味することによって、はじめてゴータマ・ブッダ出現の世界史的意義を、われわれは理解することができる。」<sup>21)</sup>

「こういう試みは、後世の仏教徒が心にえがいていた釈尊のすがたをこわすことになるかもしれないし、また読者の希望と正反対のすがたがでてくるかもしれないので、それは残念であるが、しかしいたしかたない。歴史的研究は小説ではない。われわれは歴史的真実をめざすのである。そうして十分な批判検討をへて現わし出されたゴータマ・ブッダのすがたは、われわれに向かって直接に、かならずやなにか意義の深いことを教えてくれるであろう」。<sup>22)</sup>

これら中村博士のブッダに対する向き合い方からは、どこまでも学問的真理を追い求められた博士の姿が見えてきます。

## 6.5 『世界思想史』(春秋社)

『東洋人の思惟方法』、『比較思想論』を経て、完成まで30年近くかけて執筆された中村博士の思想史研究の集大成といえるものです。『古代思想』、『普遍思想』、『中世思想』、『近代思想』からなり、これはかねてより西洋の思想にくらべ東洋の思想が体系化されていないことを憂慮していた和辻哲郎先生の示唆があったと言われています<sup>23)</sup>。

## 7. 東方学院の設立

大抵の場合、国立大学を定年退官した大学教授は、私立大学に再就職されるものですが、中村博士は東京大学退官後に、自らの私塾「東方学院」を設立されました。中村博士は次のように語っておられます。

「東方学院といっても、事務所、教室、図書室があるだけで、あとは他のビルディングの部屋を借りて講義しているだけです。資金的には運営は大変ですが、募金はしないことにしているんです。学問研究に費やすべき時間を募金集めに使うのは、学者として矛盾していますから。」

「私のところでは、免状も学位もとれるわけではないんですが、ごく少数の篤学の士ばかりが集まっています。普通の大学ではできないような高度な講義や特殊な講義もできるんです。人生観や、哲学、宗教の問題から始まって、東洋医学でも東洋音楽でも、仏典購読でも、さらにサンスクリット語、ペリ語、チベット語、ベンガル語、ヒンディー語、タミル語、現代ギリシャ語など、自由にやれるのです。講義や演習の進め方も自由になっています。本当に学問に興味を持っている人にきてほしいわけです。」

「哲学に進むには、他に経済的手段を考えておきなさいといっているんです。アメリカでは、哲学の博士がやたらにふえて、行き場所がないんですが、お金がほしいときにはタクシーの運転手などをして、金がたまると、仕事をやめて詩をつくったり、カントを読んだりしている。(略) 学問は一生の仕事ですが、純粋な形で進めていくと、経済的にはひきあわないんです。私としては、だれにも強制されずに自分で新たなものを発見していくところに、学問の喜びを感じています。真理に行きつけないかもしれないが、人間として行きつけるところまで行きつきたい。そう思っています。」<sup>24)</sup>

## 8. 世界平和のための研究

中村博士が東方学院を設立されたのは、大学の外に制約を受けない学問所を作ろうとされたためでした。その中村博士の学問の特徴を一言で申し上げるならば、それが世界平和を目指した研究であったということでしょう。

中村博士の著作『比較思想論』にはご自身の研究の目的を書かれた箇所がありますので、引用します。

「比較思想論は世界平和の実現のための手がかりを供するものである。世界が狭くなり、世界が一つになる方向に進んでいる以上、人間の諸思想の相互理解がますます推し進められねばならぬ。ことに、異なった諸民族の対立相剋は、諸民族の文化の相互理解にもとづいて解消融和されねばならない。そのために人類の生んだ過去のもろもろの思想の対比検討と相互批判の必需が起こってくるのである。比較思想論は平和への道の門を開くものとなるであろう。」<sup>25)</sup>

この『比較思想論』を発展させた『世界思想史』のなかで中村博士は「仏教の教義学者たちが忘れてしまった諸思想を拾い出し、また教会が禁止した多くの思想を視界の中におくならば、東も西も同じ、たいして違わない」と結論づけられました。そして、人間性が同じであるならば、共通の論理を持つことが世界平和につながると確信され、遺著となる『論理の構造』(青土社、2000)をまとめられました。

## 9. 「慈しみ」と「温かなところ」

1999(平成11)年10月10日午前10時、中村博士は86歳の生涯を閉じられました。東京の多摩墓地と松江市八束町にある大塚山には「慈しみ」と題された言葉がぎざまれています。

一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

一切の生きとし生けるものは幸せであれ。

何びとも他人を欺いてはならない。たとどこにあっても他人を軽んじてはならない。互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。

この慈しみの心づかいを、しっかりとたもて。

これは中村博士が原始仏典『スッタニパータ』から意識され、洛子夫人によって清書されたものが刻まれています。この「慈しみ」を博士はまた「温かなところ」と言い換えられています。

「私は長い間、東洋の思想・精神的伝統の探求をしてまいりました。それを貫く〈東洋のころ〉というようなものがあるとすれば、それはいったい何か。その底に流れるものを求めての半生であったといっても、過言ではないように思います。そしてその〈何か〉とは、ひとり東洋のみのものではなく、<sup>あまね</sup>普く、広く、世界の人々にいきわたっているものに違いない。そのような確信をもつものです。その何かこそ、「温かなところ」ということではないかと思うのです」。<sup>26)</sup>

「慈しみ」あるいは「慈悲」という言葉はこれまで仏教的な枠組みの中で

重んじられてきました<sup>27)</sup>。しかしその自らの墓碑に刻まれた言葉ですらも、より広い立場の人に伝えられようとする中村博士の「温かなこころ」こそ、私たちに遺された世界平和への道しるべなのかもしれません。御清聴ありがとうございました。

- 1) 「東洋を見る—ラフカディオ・ハーン」『比較思想の先駆者たち』(広池学園出版部、1982) 93-102頁。
- 2) 前掲書、97-98頁。
- 3) 前掲書、101-102頁。
- 4) 例えば『古代インド』(講談社学術文庫、2004)。
- 5) 「アショーク王の時代を仏滅百余年と伝える、北方経由でもたらされた漢訳仏典の伝承に基づく説で、北伝の説と言われる。宇井伯壽は、アショーク王の即位を紀元前二七一年とし、(略)ブッダ入滅を紀元前三八六年とした。その後中村元は、アショーク王の即位年を見直して、前二六八年とし、それによって紀元前三八三年を仏滅とした。現在ではこれがこの説の主流になっている」。池田練太郎「仏教教団の展開」『新アジア仏教史02 インドⅡ 仏教の形成と展開』(佼成出版社、2010年) 121頁。
- 6) 「多くの資料を用いている点で中村元(1992〈A〉1992〈B〉)を凌ぐものは現われていない(なお、海外の仏伝研究に関しては中村元(2005)を参照されたい)」。平岡聡「仏伝からみえる世界」『新アジア仏教史03 仏典からみた仏教世界』(佼成出版社、2010年) 22頁。  
 ※上記1992〈A〉は『中村元選集決定版第11巻ゴータマ・ブッダⅠ』(春秋社)、1992〈B〉は『中村元選集決定版第12巻ゴータマ・ブッダⅡ』(春秋社)。「中村元(2005)」は、中村元監修『エリアーデ仏教辞典』法蔵館、2005。
- 7) 「織田の『仏教大辞典』は小項目主義の辞典の代表で、今日でもその価値は衰えていない。同じような小項目主義の用語辞典としては、中村元『仏教語大辞典』(一九七五年)があり、語彙の多さと梵語との対照、説明のわかりやすさなどで定評を得ている」。末木文美士「仏教研究方法論と研究史」『新アジア仏教史14 日本Ⅳ近代国家と仏教』(佼成出版社、2011) 331頁。
- 8) 「戦後を代表する印度哲学=仏教学者は中村元(一九一二~九九)であろう。中村は宇井の後継者として若くして東京帝国大学助教授となった(一九四三年)。中村もまた、インド正統派であるヴェーダーンタ哲学の研究から出発して仏教研究に進んだ点で、印度哲学=仏教学の伝統を継いでいるが、僧籍を持たず、既成教団から自由な研究を行ったという点では、従来の印度哲学=仏教学とは異なるところがある。とりわけ原始仏教を重視したことは、従来の大乘仏教中心主義や日本仏教中心主義に対して大きな問題を提起するものであった。また、戦後のアジア・アフリカ諸国の台頭や社会科学の隆盛を受けて、社会経済史や

社会倫理の観点や近代化という視点を導入したり、あるいは古今東西にわたる該博な知識に基づいて比較思想的な研究へも幅を広げた。このような中村の方法は、宇井によって確立した印度哲学=仏教学を継承しつつも、その護教論的体質を解体し、思想史として再編成しようとするものと位置づけることができるであろう。中村によって、インド学・仏教学は仏教者の間の閉じた教学から、より広い社会科学や人文科学の中に開かれることになった」。末本文美士「仏教研究方法論と研究史」『第14巻 日本IV近代国家と仏教』（佼成出版社、2011年）324頁。

- 9) 「(インド研究の合間に) 許されるほんのわずか時間だけ」(※1) に行ったものであり、日本の思想や仏教の歴史を網羅的に辿るものではない。しかしその中核となった近世仏教思想の研究は、その後の研究史に大きな影響を及ぼした」。西村玲「中村元—東方人文主義の日本思想史」オリオン・クラウタウ編『戦後歴史学と日本仏教』（法蔵館、2016.11）139-155頁。

※1 『近世日本における批判的精神の一考察』（三省堂、1949）

- 10) これまで中村元博士の生涯について、『学問の開拓』（佼成出版社1986、新装版ハーベスト出版2012）がよく参照され情報量も多いが、中村自身が「はしがき」で断っているように「わたくしが自ら執筆したものではなくて、編集部が読者諸氏の興味や意向を忖度して」作られたものであるため、学問的な利用にはより慎重な態度が求められよう。これに依拠した植木雅俊『仏教学者—中村元』（角川選書、2014）もあるが、まず参照すべきは中村自身の手になる「中村元」『私の履歴書—知の越境者』（日経ビジネス人文庫、2007）であろう。また筆者がかかわったものとして、中村自身のテキストに基づいて執筆された、中村元記念館編（前田専學監修）『中村元物語—世界平和を願った慈しみの思想家』（NPO法人中村元記念館東洋思想文化研究所、2016）がある。

- 11) 東京文理科大学教授

- 12) 「ラジオも、ニュース以外は聴いてはならない。歌舞音曲のたぐいは耳にすべからざるもの、もちろん口にすべからざるものと教えられた。』『学問の開拓』（佼成出版社、1986）34頁。

- 13) 「入学」『作文集第一（巻）②』大正14年。

- 14) 「悲しき思い出」『作文集第二（巻）』大正15年。

- 15) 「十一月六日」『作文集第一巻①』大正14年。

- 16) 須藤新吉（論理学者：1881-1961）著作には『ヴントの心理学』『論理学綱要』など。「あるとき学術や技能の習得は段階的になされるのであるから、或る時期には集中的に努力して一定の段階に達するように心がけねばならぬ」『東方の英知』（玉川大学出版部、1979）13頁。

- 17) 亀井高孝（歴史学者：1886-1977）江戸時代にロシアに漂着した大黒屋光太夫に関心を持ち、ヨーロッパとアジアの枠を超えた歴史研究を遺す。著作は『世界史年表・地図』、『東ローマ帝国史』、『大黒屋光太夫』など多数。

「ドイツ語の西洋史の大きな原書を与えられ、その要点を訳出して来いとめいぜられたことがある。それは貧書生を恵んでやろうという親心からであったが、わたくしにとっては大変な勉強になった。(中略) わたくしの専攻は先生のなさったこととかなり離れていたが、しかしもしもわたくしの研究に従来の研究とは異なった新しいものがあつたとしたら、それは先生に負うところが大きいのである。」『東方の英知』（玉川大学出版部、1979）18-19頁。

18) 仏教学者：1873-1949

19) 『東方の英知』（玉川大学出版部、1979）19頁。

20) 和辻哲郎（哲学者・文化史家：1889-1960）大学で倫理学・日本倫理思想史などを教える。特に倫理学は大講堂を埋め尽くした生徒を酔わせるような名講義だったと言われる。

「専門家は非常に珍しい特殊な資料を見つけて、鬼の首でもとったようにそういうものばかりを取り上げたがるが、実はありふれた周知の資料の中から大切なことをいくらでも取り出せるのではないですか？」

（「中村元」『私の履歴書—知の越境者』（日経ビジネス人文庫、2007）156頁。）

21) 「はしがき」中村元『ブッダ入門』（春秋社、1991）。

22) 「旧版はしがき」『ゴータマ・ブッダ I』（春秋社、1992）。

23) 和辻の言として、「西洋では一貫した思想史がキチンと出来ている。ところが東洋についてはそれができていない。それをまとめてもらいたい。」（「中村元」『私の履歴書—知の越境者』（日経ビジネス人文庫、2007）158頁。）

24) 「中村元 インド哲学、仏教、比較思想論」『講義のあとで』日本リクルートセンター出版部、1980）15-27頁。

25) ⑬『比較思想論』岩波書店、1965年、330-331頁

26) 中村元『温かなころ』春秋社、1999.3 i-ii 頁。

27) 「本当に我々は、いかなる世界をつくるかという理想をもって進むべきだと思います。それにはやはり人を損なわない、傷つけないという教えですね。(略) これは生きとしいけるものを傷つけない、共に生きるという温かな理想です。(略) ほかの教えでも同じようなことを説かれますけれども、しかし、とくにインドから発してアジアの国々に広まり、東海の我が国に及びましたこの仏の教えにおきましては、人々に対する「温かなころ」ということをとくに説いているように思います。これは仏教の伝統的な言葉で申しますと慈悲ということですね。ここに教えの真髄が極まっているのではないかと思うのです。」（中村元『温かなころ』春秋社、1999.3）8頁。また「温かなころ」と仏教の「慈悲」のつながりをより強調したものとしては、前田専學「中村元先生と仏教」『大法輪』（2019年3月号）、大法輪閣、14-35頁。